門
876
巻 2

後雛奇談 幸物語巻之二

遠州曽根住浪死於客舎

鬼卵 著

○阿波の人成頃城ふるて伐成る話

去程に[illegible]助おたまいんの高としてゐるけまで、雅波より来りてまことまことの人も
多たこゝろ成る者なつて似るる人もやと何人ぞとことおぼ〜成人もあらされ
ばこれより月数成後南より費〜顔の痛り金まもおろおるふるうるうるる日
住吉へこゝろざし、ぜんまうと成しに俄ふ白雨まこゝろに降出し雷雨影〜されば
阿波いい〜人雷成恐れ乗れと土の如くうとべいうでせんとたちさ人ふに接間
て人里に家居はさく〜後門撫あるやうく此長屋門ふれこゝ成ふ人

明治三十六年 月十日 購求

石津屋

祇園じゃうにえをとゞるとうおほしゃうの家のまへに十年の恵蓋をいうさま

一辯ある人ゆうぐおほ四位えんやり奴僕位ばべてをゆく今門あるにはかの

いとゝ雷位ゆるゝをゆうぐ位方へ入く皆く雷位後せよといふ奴僕

門おへをえ出ぎのくのはし位家るにおおい地獄ふて佛にをどるおりち

あてをゆゝ助僕とも玄冥によるべのの屋情位術しい嫌うる去位のお雷位

おてをゆらどもまに小にるゆの嫌しさよとゆい美湯面にええて収びえば

えほくく寸殘をゆいんをきのふて雷位ゆるゝ人ゆりゆををを色位

体ゆしゆへと家菜位あゝ答色ゆるに雷いを薬屋とゆうえい嫌い

ゆをる色もおゆにふをゆり位慢しとてあゆるゆちよ美皆に如薬も

謝ふゝをいを止べゆもあゝべ今肯いんをおく。

手ゆの業屋ゆ湯りたまへ翌日い味味よゆをんとゆふゆをゆゝ助も何囲

ゆをゆをなる宿もあゆゝをいをの志位嫌しゝ嫌い行矢種生のんゆして

収ゆ限ゆゆ多絢いとも奇藤よ鮮を肯ゆと嫌ゆとゆしゆるにゆをゆをの

位ゆゆゝるに食後位茶位出しゝ答色ふゆゆをゆ身い大に収ゆをの志位

礼謝をれべいうて礼謝ふ釣ゆべを物も恭えゆを茶位四位生生のんとえ

ゆをゆう年猪もゆうて位位さへ連ゆゆべ歩りたまゝふいゆ細ゆあらん。

茶ハ迫位の浪人福屋ゆ盟とゆふて今ハ医業位たつをとしゆをゆ

蓋をゆう人の身の上包まべ位ゆをゆたゆをゆうゆかもゆう進べ

かく一高氏かうとも。代生の係ふやと眞左もなくつよ。ぞ〻助もたつ
ことなとあるとべ濱よ和とんふ旧び諱に系こ作行すも係しいまし。
系ハ河内の國畠山の家臣に小縁氏縁せし。冨永金左衛門とゝ者の
時共よいかやく〻のすふて金子冨左衛門とつてよりのに父氏殺こ北濱
他ての為に。かくこるしいて不く氏身行に人うふり濱とこ〻ぶ家
為命氏孫のこれと。洞田のごくれ下り。去家面にあらいまとゝれば監
接氏くことあ面くこのるふいや。行氏原さん系いに易海井
長濱よ仕へとりし。海井滅亡の後い二君よ仕へ。ぶ勝間に引こり
仁淵氏濱世とゝ。かく嘗氏やとくこ出せ。系ぶ行るの表よ。

冨永右門といつる者あり。金子氏守で生よつかく行ること。
何人なく面行るに。ぞこ助大ふ。ぞこ冨永右門とゝ。則冨右衛門に
殺さまし。亡父金左衛門ぶ初名のは。冨く父ぶ面行ふ小ひとつふ。ふ
監いまつこうよ濱派しで面い右門い金左衛門と改名して近四りふ。ふ
存生に面舎せぶるる。返をしくも遠眼ふまぶ仏ふ。ぶ面人のぶ手
氏接言し。父の仇氏討せ朋友の位を欲いとぐ〻と。ぞよ和もし。ふ氏に
名字い天へもよつこん他しで係へよ亡父の氏とつてぶ名ふ合せ
たまふこんおる嫁しや有濱やとまの血ぶの踏ぶをとつぶ。ふとり
よつこ。ぶ監氏三陣をるこて通程ふまふいぶ来ぶ監を親

と教へ。日く敵の有る所に孕る子供も知るべきなれば徒に月日に成まる。兄弟と助十八歳妹行年十六歳にて如何なる容貌の美しきとぶふ〜への衣通姫小町とも成ぬべきよりも盛有猶の大贅をもとべ兄弟が衣装公の乃ぶ程美〜〜仕えるべき〜〜助い在五中将も考らぬ様皆是成又恐せざるの程うつくしれども敵の

ぶりもみえれば涙くとして楽まず。うるはしき盛を〜〜助と拓きてうへやく。彼者かく成程よ彼年月成をしくまつれども今よ

篭を出つゝ有品も去まず。元佐矢のごく。平父ゞ三回ようる儀考るふ浪速人の寄来く地獄よ今我町の花街い若狭ゞ深度

岡の果までも。ひ地ふ来らざるハあらず。分成様をい南方郷〜〜。ロ

惜もとどろくの川行に分成流ゞ諸人の心成様〜。敵の有る成さぐり

求るより所ハ佐らびがる所を去ふちまでありて知べくもあらべ今その

初ゞの時のごく。彼所へ移ゞ月のうさへるらねべ。月石年のれりひに

ゆ〜〜。佐ぶあハを彼様ゞ分成流ゞ。ぶとうて佐るべ。天の表をふて知れ

ぬすもあるほどりまとバ出るゞ成様よ。佐様よ。ぶ盛

く助も智あとさへ云であるゞ。ぶ〜〜助〜〜。ぶる涙をおさへ。天陸

味出ゞ〜〜。ぶ盛ごく心情ふて。行一つ不自由ハ出りまとも。屋敷場と

ゆふひハ敵の彩場ゞ海ゞ成也て。ぶよ。ぶい西国へ張えて。ぶる

あらばやとて知ぬるすハあるまじ。扨盛屋何幸蔵が死ひけるこゝ
けよの山名志と。只者成潔のごく流して死ひけるとが扨盛もやゝ涙だれ
さへせる後嫁女の扨ゝ身を変い皆金をへるゝ去るふ私人の乃べかど
不自由なく去る育なるそ。身と川行ふ流めんとい天晴の列女なり。
敵式弱んための仮体なるべ。なぶら身式汚なる及ぶぬ仕様ゝそあし。
金張式金む勇にあらねば。曲婦の亭主を呑迚せ。陸とに勇をとと
べ。よ式も極るふなどべいつふても稽まる陽式ゝるゝふ非らうんと。
扨盛自身行所ゝまゝ。氏本屋何系が俳ゝ。かゝゝの奉公人
抱へたまはらんやと新ゝ。亭主を繋ぐ為ゝ仲武ゝまゝ身の代をならべ。

仮体をまゝるい今初ならん。容後とえていうゝとも相法いゝをべしとぶるとゝ
ゝせて彷徊に来る。まづ扨盛が家居をえて撞式洗しかゝる有福の
人の娘が勇をまゝせんとい。ゝて濃婦ら但し蒙体の非が。天の臼女なら
んとんよたしく涙の乃に絡るべ。扨盛内ゝ入て娘式えたまんとふゝたゝ
面恥げゝえ出るとまをとりてゝ。体ゝ天人の紅白ならんとたりゝ年の
笹中ゝ廓中ゝ。何人ゝ洗べくべき容ゝをやゝるべとゝ生なべらゝへ出し
ても。大事式扨んい考の内ゝあるとゝ。ゝ見ゝ扨盛ゝ。ゝの仕ゝ洗ゝる。
勇い陸とゝて。ゝても。拵金式百両ゝあゝるべし年ゝるもれんゝ仕ゝべと
云ゝ。扨盛ゝ式ゝゝ。ゝ仮体ゝ愛時い式方ゝゝ仕ゝ出すい宮法ゝゝふ

其分ようゐ院文武元てきさとるゆいで金子入用ゆあらんぢなりて
つり銭へ銀も分銭大切ようとぐしゝ彫刻せんと金五十両元出しゆ金とうぢ
不自生ようやうゆとぐしゝと後世ぐ亨主い高ひ弱ようとゆく大金を小さに
世よと後したまいて勧ようといぢて〳〵ゆめうろうようるとかう紙屋で
家のくらふよ世の友の分変うりせが至る法悪〳〵ゆ至狂より引えるゆ空
法ようふ扨置ゆ〳〵助も手収ひゆ百銭出〳〵亨主ゆ望の者にもよ自〳〵
答ようしゆ酔ふふじて男〳〵助銭ようと屋ようゆ何と法〳〵むぢゆ
男ようもふ抜つきこゆり〳〵歌にようより氏ようゆ月の銀の来ゆ〳〵を通
ようゆの後に歌ようぢ付ようゆ〳〵と後ようゆ殺下侍の後銭ようる〳〵と後ようゆ

けようゆ付ようも力男ようゆ踏ようして男ように手ゆ銭ようて亨ようも男ようの者
もゆ代ようゆの分変ようりようとゆ〳〵ようとて後ように踏ようる

○金子富右衛門法滅ようまて話

法ようにかつるゆも金子富右衛つ銭ようやまりて手数〳〵法然
としてありるゆ法法ようの者ようゆ銭ようゆ代せゆ金左衛つゆ銭屋の古銭
陸させんとゆ〳〵ようゆ命ゆ銭ようゆ陸ようもあるゆ〳〵ようゆ山崎
銭に丹波路へようりるようるようも今二三ようゆ大ようの命ようる富永ようゆ育の成
人銭ようて打ようりようゆ銭ようゆ亨〳〵ようゆ法ようゆ後ようゆ二の明ゆ
銭報〳〵ようゆ銭ようゆ系ようを一ようゆ後ようゆ行ようゆ武ゆ

歩行てはしらうちに行径に山路を踏まよひ晩鐘の鐘声るにぞきく
くらき森林の中へまよひ入ければてん泊まるんの熱に沈し狐狸ま
迷ひかゝる所へ侍引寄しよせ己それの畜生にいかで魂を奪れんやと。
性鬼ありける所をにがくの杉の大木の陰より大の男立出ければ
是は兼ての山賊なりと猿客懐中のある物を渡さるべし。夜毎大小は其
元にまかせ置べしと例の山賊より也。柔和にすゝめ共。富ある心程に
なじて某すゝむるかすりの山道へ踏まよひば。出異なる盗賊の今
やもると言ありりん待せしに抑く逆を出すゆゑに某はおやまりて
朋友をはふろけ。其場より立退きければ懐中に一物もなし。幸の盗人原

道に至んるゆゑ。金子ある具備に銀からんと。自若としていひければ世の
子常の盗賊ならせば大ひに怒ってだんびら引抜おてかゝる所なかるべくして
まは笑止なる所なるゝ志也。世には何りの事ければ懐中を探りて渡
いかなりとも取らんやさんとて然ばし入懐中を探るに一銭もあらざれば。
盗人大ひに顔暴して抑く足下は如何く思さん。某が隠家は此山奥に
待る。某も昔は武士なる。鄙業はなしいかで森罪にてぞんじいへん
いざたまへと先に立て行にぞ。富を集つも大に不審。此者にて旅人の
盗賊振つきて切てかゝるを。某柔術を尽し手の下に切伏んと思
しふおし。強合のぬけし盗賊の跡とおりひ行に付て行程に五丁ほ

ゆりとおもへば石門いうく。ゆるす。暴うる果の屠所。まづ門に入く。母人
今迎りしとうよ母い佛をふ。ふ仏中てあり。久見ゆりしらいつもくり
果りし忘まても旅人殺るゆるれと殺きいせしが何らもものら
ざるゆ。感ても附いはどりしらと。豆腐の母にい仙合めに上うるとい豆
人丹矣ひ母人呪びうゆ今自い大小原流なし。旅人の統後せら
るく殺ひ迎りしぞや。冬空後においさん。殺と然よ食しそるて。
いとく怨にいに母も大ひよ呪でかしたり。旅人も武士とつ来
付ゆ豆腐殺安廣よし付ま。助ると金い元ざるまりに中付付ぶく
囲爐裏の傍へ寄ゆく秋と供に面付ちん。南無二の孫阿佛と義さ

こべ豆人い寄右寄つて仮殺出しぶ。ぶ食しめく。山家のるゆるまゆ何も行べ
らぶ。さのへ手寄し紙まの焼る殺。樵みをして糸らせんとうぶら爐と
拵へらちく餐無まで寄右寄つも不事い陸ねども。仙るゆるとぶ縁
退ゆも及べどほく食殺呪しゆる氏豆腐いるるものぞ後の幸殺ゆて
しゆ終人なし。

金子寄右寄つ山紙ふ芸金紙芸ふ話

文より寄右寄つ豆紙親ゆて。行焼のとふ焼卅とのみて。金
ゆが寄れを寄ゆふ。寄右寄つし豆腐の実をを焼しゆ金右寄
をるて敷し金を手拵垂ゆるゆ孫寄するとゆるくるゆは腐殺

る事を発心して。却て是下を義士形。今の世にいうて義侠の
人にらんや。また甲州武田家の浪人を傳をして用ひ
らまでと。世武是法を毎を仕ひ。白昼ふを打ち退き。二君に
仕ふる志わるくもむ。此冊彼此より数男しあてあるしに十色悪
賞賊数多ありて。推量をなやましをことごとく切捨し毎備
とと。此変ふ産をむすび住といへとも。攝州のみふく商人
は侠を業とふ是ふ侠を甚表ふあらねども。ひはたの
業をおしむ。ふうんどと只人を殺して金を奪といへども。志
かて人を害せど。不義の商人かど博奕打の悪者おど

此財産とれの。是下を今世にいふ世を傳と因縁形ふん
ふ紀る備へと世の皆義を殺くて富ふつ歳ふして物く志
のこしさ盗賊とのふ。ふ今礼世の時表なんじ。ふて太縁のこ
ふ知人くと知とでと気ふて気人とど。煩ひを忘して伏ぬ望日
紀お富ふ高つ多ふとうのれ術して別んとする。賊のいへらく
ふて下行ふ人志ふ。富ふ高つ所をこと。行ふと定ふこと。
侍ふと。今一ふ年世武志のび。金ふ高つふ仕ふ対ふんと思ふ
の外い作ふでとしふふ。紬ふふ一ふ甲ふ表へ打ちふ
時義をはふたふ人。武ふ白仕ひし者甲府ふ商人ふ有ふ

ふれもせず。ひすがらくと思沒し。幸色の金をとり出
こもを活用したまへと指おせ。男ちつたく赤面しと夕色
愛情はよりえまでは石流ちる上いはでは金を待べきと。押度
せで毎うち気人やうたのく辞退したまへ。金をなか有強
の士を止宿させ。見ず身れよをさき。裏面して金大十両をむし
ゝをもて世を出よし。残しくよ親よさまく辞退しぬ
をぜ待引でうち捨て伴をたまへ此母も我子を此金を
根てふ生ほど。見下れてをさを強流の人をもちうちにく待る
と為ひとうろと男ちつも屋くも義心と裏じたうど

暫く思借りて甲州逗留の間をいうみりて返かい
さんと更納屋く紀州へとうち別をうれ

雪物語巻之二終

雪物語巻之二の巻終